

IB学習者像にかかわる 調査から見えたこと

志村 知美・池田 輝政

(追手門学院大学アサーティブ研究センター)

平成26年度入試から本学が導入したアサーティブプログラム・アサーティブ入試には、設計コンセプトとして、『高校生の中に大学で学ぶ姿勢を育成し入学へ導く』と、『基礎学力とアサーティブな態度を備えた学習者像の育成』という二つの考えが内包されている。このなかで、『アサーティブな態度を備えた学習者像』のモデルと位置づけたのが『IBの学習者像』である。本報告は、『IBの学習者像』の理解を深め、その向き合い方を確認する目的で企画した訪問調査の知見を、志村と池田の対談を軸に整理した。

キーワード:アサーティブプログラム・アサーティブ入試、IBの学習者像、高大接続、大学入試

1. はじめに

本学では、平成26年度入試から、学ぶ意欲や姿勢を育てて入学へ導く新しいスタイルの入試を導入した。アサーティブプログラム・アサーティブ入試と呼ぶこの育成型入試制度の設計コンセプトには、『高校生の中に大学で学ぶ姿勢を育成し入学へ導く』という考えと、『基礎学力とアサーティブな態度を備えた学習者像

をアサーティブプログラムで育成する』という考え、の二つが内包されている。

『高校生の中に大学で学ぶ姿勢を育成し入学へ導く』という考え方は、AO入試や推薦入試に創意工夫を進める大学では入学前教育のプログラムによって実践されている。この限りでは、アサーティブプログラム・アサーティブ入試の独自のコンセプトではないが、この考え方に『アサーティブな態度を備えた学習者像の育成』を組み合わせるのが、独自の創意で

ある。この『アサーティブな態度を備えた学習者像』のコンセプトを設計する際に参考としたモデルあるいは先行事例が、国際バカロレア機構のIB学習者像である。

IB学習者像に注目し始めたきっかけは、バカロレアという用語をめぐる食い違いに興味を覚えたことにある。大学関係者に国際バカロレア試験の話題を向けると、フランスの大学入学資格となるバカロレア試験と勘違いされることが多々あった。そのことを経験して、国際的な大学入学資格の国際バカロレア試験（以下、IBと呼ぶ。）の知名度は案外知れ渡ってはいないことに気がついた。また同じバカロレアの名前を使っているのに、その違いを知る人でも特定国かあるいは国際的に通用するかの話題にとどまる場合があった。

そのことをきっかけに、その違いは何かについて興味をもって調べてみると、少なくとも二つの点について違いを確認できた。一つ目は、フランスのバカロレア試験は高校（リセ）の教育課程で学んだ成果を評価する考え方であり、一方、IBは初等・中等学校で学ぶ教育課程の成果を評価する考え方であった。二つの試験は学校教育で学んだ成果を評価する点では同じであるが、教育課程の範囲はIBのほうが広い。

二つ目はIBの独自性である。それは2000年以降に設計されたIBの学習者像の導入にかかわるものである。現在のIBには国際平和教育の理念がある。これは世界中のすべての教育機関の教育理念につながる共通性をもつ。この特徴のもとに、初等・中等学校のなかで育成する学習者像についても共通基盤として掲げることができる。認定学校（ワールドスクー

ル）は、IBが掲げた学習者像を指導計画・方法・評価のプロセスを含む教育課程（カリキュラム）として組織運営ができるかが問われる。つまり、教育理念の具現化としての学習者像、それを実現する教育課程、それをPDCA（プラン、ドゥー、チェック、アクション）プロセスとして機能させる組織体制、という一連の基準認定のシステムがIBには存在し機能している。認定学校はIBの学習者像を組織として受容し、それを自校の教育・学習のシステムに反映する責任がある。その意味では、IB学習者像は初等・中等教育のみならず、大学教育までを貫く教育プログラム接続のかなめとして位置づけられている。

2013年に改訂された現在のIB学習者像の詳細については後述するが、その意味の普遍性を理解できたことは、『アサーティブな態度を備えた学習者像』というコンセプトに強力な後押しをしてもらった思いであった。しかも、10の要素からなる学習者像の表現は大変親しみやすく、例えば、“Balanced! バランスのとれた人”、“Caring! 思いやりのある人”、“Communicators! コミュニケーションができる人”、などのように、一つ一つが深い意味をもつ言葉を簡潔に掲げてある。募集と入試の業務に携わる現場の目線から、この表現のレベルは現在の受験生にとって必要なことであると判断できた。このようにして、『アサーティブな態度を備えた学習者像』のアイデアに普遍的な入学者像の根拠を与えてくれるのが、IBの学習者像であるという仮説が生まれた。

本報告は、この仮説をアサーティブプログラム・アサーティブ入試の今後の開発・進展にどのように生かすかを探る目的で企画した訪問

調査の一環として行う。IB関係者へのインタビューのなかで触発された知見、その後の収集資料の検討と議論を通して見いだした課題と問題点を、志村と池田の対談の方法で明らかにしていく。

2. 調査の方法

事前のメールにてIB関係者に提示した調査内容は、IBの学習者像に焦点を絞りながら、IB制度設計の背景、設計時の課題、学習者像の導入経緯、IB認定学校の要件、IB学習者像からみる大学教育の将来、の以下に示す5項目であった。訪問当日は、これら5項目に対して口頭で簡潔に説明を受け、詳細については必要な文献・資料を提示してもらった。

- ①IBの制度設計には、どのような背景があったのか。
- ②そのプロセスで検討をされたことはどのようなことか。
- ③10の学習者像は、どのようなプロセスで導かれた結果なのか。
- ④IBの認定評価は、どのように設計されているのか。
- ⑤IB学習者が、大学で学ぶにはどのような大学教育がいいのか。

調査日程は、追手門学院大学の志村知美(アサーティブ研究センター研究員兼入試課係長(アサーティブ担当)・池田輝政(アサーティブ研究センター長、基盤教育機構教授、)・浅野憲史(教務課長)の3名が、2015年10月2日にシンガポールに所在するIBアジア太平洋地区支部を訪

問し、地区代表のイアン・チャンバース氏、ブラッドレイ・シュリムプトン氏、そしてステファニー・リオン氏にお話を伺った。

3. 調査の結果:IBの学習者像の認定学校での実現状況を中心に

以下では、対談形式を採用して、訪問調査時の臨場感を少しでも残しつつ、その後の文献・資料の分析を通して新たに学んだ知見を述べてみる。

3.1 IBの学習者像とは何か

池田:シンガポールのIBアジア太平洋地区支部を訪問してミーティング・ルームに案内してもらい、着席してすぐに目に飛び込んできたのが、私の正面左側の細長い壁に縦一列に貼り付けてある10個の学習者像パネルでした。パネルはB5サイズの大きさと、鮮やかなブルー色を背景に白抜きで10の能力概念と解説が付けてありました。貼り付けた順番に意味はあるのか聞きそびれましたが、表1には、上から下に配列された10の要素に番号を付け、既存の日本語訳¹⁾とともに私たちの解説も付けて再現しています。それにしても、これを見た瞬間に受けた最初の印象はいまでも忘れません。それは一言で述べれば、「IBは学習者像を本当に大事にしている」という印象でした。実際に使っていると判断した志村さんはどのような印象でしたか。

志村:IBプログラムに出会って、調べれば調べるほどワクワク感が広がりました。止まらない好奇心が、訪問調査の実現に繋がったと思います。実際に訪問をして、IBのパネルが目飛び込ん

できた時は、パネルから「凜」とした印象を受けました。IBプログラムに対しての揺ぎ無い信念が放たれているように感じ、圧倒されたことを覚えています。とは言え、ただのパネルです。しかし、新しい入試制度の設計に四苦八苦していた私にとっては、閃きの神様からの贈り物だと思えるほど、10の学習者像との出会いは衝撃的なものでした。この学習者像は、アサーティブプログラムとアサーティブ入試の構造化の基礎となっています。ですから、私にとって学習者像のパネルは、「よくここまで辿り着いたわね」と温かく迎え入れてくれたと感じました。

池田:パネル掲示の学習者プロフィールを見たことに触発されて、行動主義心理学に位置づけられるA.ブルームの名前を出して、認知・情意・精神運動の教育目標3分類に10の要素をあてはめるとどうなるか、という質問をしました。とっさに思いついた質問でしたが、思った以上に、ブラッドレイ・シュリムプトン氏が興味を示して、その場で分類を試みてくれました。質問そのものを楽しむスタッフの姿勢には好印象をもち、IB関係者が学習者像の構造化には誠実に取り組んでいることを納得できました。

その場では、10の要素はすっきりと3分類には収まりませんでした。分類自体は私にとってはあまり本質的ではないものでした。例えば、「1.Inquirers:探究する人」は、探究や研究活動の際に不可欠な好奇心を育む、それを展開できるいろいろな知識やスキルを獲得する、生涯にわたって探究・研究を続ける熱意を育む、という学びを意味しています。したがって、これは認知・情意・精神運動のすべての領域にかかわる概念です。実際の学びと指導の場面では、小学校

段階では好奇心の側面に重きをおき、中学校では好奇心を大切にしながらも知識やスキルの獲得にも重きをおくということも可能だと考えます。

さらに「2.Knowledgeable:知識のある人」を例に挙げると、これは特定の用語や概念を使って理解の定着を図る、複数の教科に横断する知識を探求する、地域やグローバルな課題にかかわる議論やアイデアづくりに参加する、という学びが求められています。誰が判断しても、認知領域の目標に収まる要素だと分類はできますが、地域やグローバルな課題にかかわる議論やアイデアづくりに参加する、いわゆる右脳・左脳の両方、知的好奇心や身体を使うような構成主義の学びのアプローチ、いわゆるアクティブラーニングが求められています。ですから、実際の学習場面では分類という枠にはめることにはあまりこだわらざるべきではないでしょう。行動主義の評価・測定から発想する学びのアプローチからは操作的に分類するのは目的ですが、それを実際の学びと指導の場面に画一的に適用すると、学びの広がりや深さを楽しむ態度を育むことを阻害することになるかも知れません。

質問を通して、学習者像の10の要素はまだ進化の段階にあることが理解できました。また事後の検討を通して、学習者像の理論的な背景には構成主義の学びのアプローチが存在していることもわかりました。ということは、指導する側の姿勢としては、認知・情意・精神運動にかかわる10の能力概念の全体を学びの目標と方法と成果の観点から咀嚼し、実際の学びの場面では子どもの現実に合わせて、どこに重点を置くかの判断が求められます。

指導する側が気をつけるべきは、成績を量的に順位づける評価・測定という操作的な観点か

ら目標を部分的に解釈して切り取ると、学習の成果を一次元的な質の問題に閉じ込めることになります。誰にとってもわかりやすい便宜性を優先しすぎると、学習者が学びの結果を気にするようになり、成長のための学びの目標とは向き合えなくなるおそれが出てきます。このような考え方をとるかぎり、学校現場がIBの認定学校の基準²⁾を理解し実践するのは難しいでしょう。志村さんは、そのような考えに立たないで、IBの学習者像はいまの受験生にとって役立つと学ぶ側の目線から判断していますが、それをもう少し説明してもらえますか。

志村:新しい入試制度設計には、既存のAO入試を改革することを考えていました。入試改革について考える時は、常に慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスのAO入試が根底にあります。学部の求める学びの姿勢は、既存の入試では選抜できないであろうから新しい入試制度を作ろうという考え方です。各大学では、求める入学者像を公表していますが、現実問題として、どれだけの高校生が進路選びに活用しているかは疑問です。実際に受験生と話をしても、ほとんどの受験生が「知らない」と答え、知っていると言った受験生は、「でも、大学名を入れ替えても使えますよね」と忌憚のない意見を教えてくださいました。

何のためのAPなのかと疑問でした。学びたい自分と求めている大学の想いが一致するようになると考えられているのだろうが、多くの高校生と接することによりわかったことがありました。そもそも、高校生は学びたいという認識をしていないのではないだろうか。入学者像を意識する以前に、大学で学ぶ姿勢を備えなければ、APのメッセージは届かないという結論に辿り着きました。

大学で学びたいという気持ちを整理するために指標があればいいのだろうか、ブルームのタキソミー(Taxonomy)やルーブリック(Rubric)を参考にしました。でも、なぜだかしっくりこないのです。違和感がありました。しかし、IBの学習者像を見た瞬間、「3.Thinkers:考える人」が全ての始まりになると思いました。考える→自己を知る→足りないことを補う→バランスが取れる→これらのプロセスを振り返る→学ぶ意味が分かる、のではないかと仮説をたてました。この考えに本学のできることを踏まえて構築していけば、高校生に大学で学ぶ姿勢を育てる教育システムができるのではないかと思ったのです。

私が、タキソミーやルーブリックに感じた違和感の正体は、育てるのではなく、評価することが全面に感じられたからです。評価がスタートにきてしまうことに、無意識に抵抗を感じていたのでしょう。もちろんプロセスの検証のためにも評価は必要になりますが、IBの学習者像は、評価だけではなく、理念からプロセス・評価までを包み込んでいるメッセージなのです。アサーティブプログラムとアサーティブ入試も、本学の教育理念で包み込んだものとなっています。包み込むという発想なので、生徒たちの現状に合わせて、風呂敷の大きさを変えなければならないと考えています。この柔軟な発想も、IB認定校のプログラムがどこの高校も同じ内容ではなく、IBの理念を貫いた教育プロセスと評価をそれぞれの高校が設定していることからヒントを得ています。

表1 IB学習者像(日本語訳付)と解説

1. Inquirers: 探究する人

解説: 探究や研究活動の際に不可欠な好奇心を育む、それを展開できるいろいろな知識やスキルを獲得する、生涯にわたって探究・研究を続ける熱意を育む、という学びが求められている。

2. Knowledgeable: 知識のある人

解説: 特定の用語や概念を使って理解の定着を図る、複数の教科に横断する知識を探求する、地域やグローバルな課題にかかわる議論やアイデア交換に参加する、という学びが求められている。

3. Thinkers: 考える人

解説: 複雑な課題を分析し責任ある行動をとることができる批判力と解決力を身につける、合理的かつ倫理的な選択・決定を自発的に行う、という学びが求められている。

4. Communicators: コミュニケーションができる人

解説: 一つ以上の言語と多様な方法でものおしぜずに自分らしさを表現できる、チームの目的に向けて力を合わせることができる、他者およびグループの多様な考え方に耳を傾けることができる、という学びが求められている。

5. Principled: 信念を持つ人

解説: 誠意と誠実・公正と正義・人間の尊厳と権利を常に尊び行動できる、自らの行動とその結果に対する責任をもつことができる、という学びが求められている。

6. Open-minded: 心を開く人

解説: 他者の多様な価値観と伝統を重んじるとともに自分たちの文化や個々の歴史を客観的に評価することができる、自ら進んで多様な経験を通して成長することができる、という学びが求められている。

7. Caring: 思いやりのある人

解説: 共感する・思いやる・敬う態度を示すことができる、奉仕活動にたずさわることができる、集団生活や地域において自分を積極的に表現できる、という学びが求められている。

8. Risk-takers: 挑戦する人

解説: 事前の計画と決断をもって不確実な状況に対応できる、新しいアイデアと斬新な構想を練るために一人で努力できあるいは仲間と協同できる、挑戦と変化に直面して臨機応変で柔軟な工夫ができる、という学びが求められている。

9. Balanced: バランスのとれた人

解説: 自分自身や他者の幸福を達成するためには知的・身体的・感情的側面の生活バランスが大切であることを知る、人および社会からの自立の大切さを知る、という学びが求められている。

10. Reflective: 振り返りができる人

解説: 自分自身の考えと経験と社会についての思慮を深める、人としての成長と学びを支えるために自分の強みと弱みを知る、という学びが求められている。

3.2 IBの学習者像と認定学校での実現状況

池田:私は大学入試センターに勤務していた1990年代前半に、IB試験の制度や問題分析にかかわったことがありました。そのときは、大学1年次レベルの問題水準がIBの学びの内容だということで、日本の大学入試センター試験には参考にはできないことがわかりました。しかし、志村さんが着目した現在のIBは当時とは違っていています。先にも述べたように、高大接続のかなめとしての学習者像が学習の成果の目標として存在していますし、学習者像は最近においても2008年、2009年、2013年と改訂されてきているので、その構造と内容が進化の途上にあることも理解できました。その上で訪問して関係者に質問したのが、認定学校はどこまで学習者像を自校の学びと教育の内容のなかに反映しているのかということでした。この質問に対しては、IBはすでに多くの関連の調査を行っていることを教えてくれました。事後に研究リソースを検索したので、一例として米国の認定学校についての最近の調査研究²⁾レポートの結果を表2に簡単に紹介しておきます。この表2から見えることは、学習者像の解釈と目標設定のプロセスに踏み込んで、認定校の傾向性や問題点を把握するだけでなく、学習者像そのものの設計やプログラムのあり方にもフィードバックをしようとするIBの柔軟な姿勢です。

志村:当初、IBについての認識は「授業を英語で受けるプログラム」からスタートしました。短絡的に英語ができる帰国子女たちのための授業だとも思っていました。しかし、フランスのバカロレア入学資格試験と国際バカロレアの違いに疑問を持ち、関連の本を読み、セミナーに参加して自分なりに整理ができてきたと思います。しかし、ま

だまだ日本語の文献が少なく、調べれば調べるほど知りたいことが増えていきました。訪問調査で私が一番確認したかったことは、誰のためのプログラムなのかということです。もちろん生徒のためと言われるでしょうが、プロセスなどを知れば、本当に生徒のことを考えたプログラムなのか、実施する側の都合で設計されているのか見えてきます。昨今、入試改革が旬な話題になっています。誰のために入試改革をしようとしているのかわからない話があります。「大学経営のため」も必要な理由でしょう。しかし、教育機関として、教育より経営が全面に出してしまうのは残念なことだと思います。アサーティブプログラムとアサーティブ入試は、私の目の前にいた高校生や在学生の声を集めて、導き出した結果です。少なくとも大学経営の視点は重視していませんから、手間隙を重視している設計になってしまいました。

正直、私にはIBのレベルが高いのか低いのかはわかりません。しかし、現在の日本の教育では適応できないとは思っています。理由は簡単です。IBの教育は、10の学習者像によって構築されているからです。高校生と話をしていると、時々質問をされます。「高校の勉強って受験以外で役に立つのですか」と。1点でも多くテストの点を取るために暗記をしても、大学へ入学したら役にたつのですか」と。大人は、「大学での学びの基盤作りだから、しっかり勉強しなさい」などと答えますよね。私もそうでした。しかし、彼らのこの疑問を受け止めることにより、新しい入試制度が見えてきたのです。理念を芯にして、授業が構築され評価されるこのシステムは、本当に素晴らしいものだと思います。認定校が増えることは、日本の教育が大きく変わることとなるでしょう。決して日本の高校がIBの認定校になることが必須で

あるべきだと考えているわけではありません。それぞれの高校(大学も)が、理念を貫いた教育を

確固たる形で実現できるような取組みになれば素晴らしいと思います。

表2 事例校調査にみるIB学習者像(日本語訳付)の実現状況

調査対象となった米国の認定学校5校は、上級2年課程で学ぶディプロマ・プログラム(DP)を開設する高校である。その内訳は公立高校3校、公立国際高校1校、宗教系私立高校1校である。調査の方法は経営者・教師・生徒に対するインタビューと質問紙の両方が採用されて、さらに生徒の外部標準テスト成績なども分析されています。調査の観点は、(1)実現と(2)外部効果の二領域に分けて、全部で9項目から構成されている。

(1) 実現(Implementation)の観点

- ① 学校関係者は学習者像をどのように解釈して自校の学習目標に設定したか
- ② 学校関係者は学習者像をどのようなプロセスで実現をはかったか
- ③ 学校関係者は学習者像を自校の教育理念に組み入れるためにどのような工夫を行ったか
- ④ 生徒は学習者像の全体とそれぞれの10の要素をどのようにして理解したのか
- ⑤ 学校関係者は自校の条件に照らして学習者像の実現にどのような独自の工夫をしたのか
- ⑥ 学習者像の実現と適用のし方に関して認定学校の間にみられる異同は何か
- ⑦ 学習者像の10の要素に対する生徒の学びの外部指標(習得感、自己評定など)との関連はどのような状況か

(2) 外部効果(Impact)の観点

- ① SATやACTのような大学入学に使われる外部標準テストの成績について認定学校の生徒はどのような状況か
- ② 外部標準テストの成績に関して認定学校の間や全国平均との違いはあるか

以下には、実現(Implementation)の観点から分析された、「①学校関係者は学習者像をどのように解釈して自校の学習目標に設定したか」の知見の要約を紹介します。

1. Inquirers: 探究する人

要約: 個人およびチームで探究・研究を進めるスキルの獲得に重点をおく傾向がある。

2. Knowledgeable: 知識のある人

要約: 知識の理解や統合については地域的な問題よりは国際的な問題のほうに重点をおく傾向がある。

3. Thinkers: 考える人

要約: 特定の限定された問題について批判的思考力や推論能力の伸びに重きをおく傾向がある。

4. Communicators: コミュニケーションができる人

要約: 書く、話す、演じるなどの表現力や他者への傾聴力を育む機会を重視する傾向にあるが、言葉で創造的に自己表現する力については避けがちである。

5. Principled: 信念を持つ人

要約: 他者の作品や著作などの盗作や無断引用の責任という解釈にとどまり、人としての権利や尊厳にまでは踏みこまない傾向がある。

6. Open-minded: 心を開く人

要約: この要素については、学習者像で求められるものより広く解釈されがちで、多文化や多元的見方を強調する点が共通にみられた。しかし、経験からの成長という視点はあまり解釈されない傾向がある。

7. Caring: 思いやりのある人

要約: 共感する・思いやる・敬うという意味の解釈はできているが、目標設定にはあまり重きをおかれない傾向がある。

8. Risk-takers: 挑戦する人

要約: データの解釈や作品・アイデアの創作にともなうリスクを減らす方向に目標設定をしがちである。計画や決断をもって逆境や困難な状況を乗り切る不確かさへの対応法にまで解釈は及ばない傾向がみられる。

9. Balanced: バランスのとれた人

要約: この要素については解釈としては難しいものではない。しかし、教師と生徒の双方からは、現行のIBのプログラムでは感情と身体的面よりも知的な面の学びにかなり重きをおかざるをえないという批判があった。

10. Reflective: 振り返りができる人

要約: 個人による学習経験の振り返りとして解釈され、とくにIBプログラムの体験活動(CASと呼ばれる創造性・活動・奉仕)に結びつけただけの目標設定が多くみられる。

4. むすび

IBの学習者像を『アサーティブな態度を備えた学習者像』のモデルにできるという仮説は、今回のIB関係者への訪問調査でさらに確かなものになった面がある。他面では、IBの学習者像はあくまでも認定学校の教育プログラムのなかで実現されるものであり、今回紹介した米国の認定学校5校の調査を知るなかで、その実現にはいまだ課題があることがわかった。さらに、IBの学習者像自体にも進化の余地がまだ残されてい

ることも理解できた。

2015年12月に提言された高大接続答申では、大学のアドミッション・ポリシーが形式を満たすだけでなく、高等学校の関係者や志願者とコミュニケーションが可能なように設定・運用が期待されている。しかしながら、その期待に大学が向き合うためには、高等学校における基礎学力への要件以外に、独自のアドミッション・ポリシーとして何を盛り込むかは、高大接続のかなめとして位置づくIBの学習者像の現状を理解するにつれ、簡単なことではないことが明らかになった。

機能するアドミッション・ポリシーには何が必要

とされるのか。IBの学習者像に焦点化した今回の調査から見えることは何か。このことについて以下に複雑な論点を簡潔に整理してみる。

第一に、アドミッション・ポリシーの設計をどのように進めるかである。アドミッション・ポリシーの設計は、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの策定を踏まえた一貫性が求められる。このことが大学教育に接続するかなめとしてのアドミッション・ポリシーの根拠となる。しかし、学習者の視点に立ったディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの策定の現状について、それが学生の履修行動に生かされているかという観点から問えば、各大学の対応にはいまだ多くの課題が存在する⁵⁾。

第二に、かりにアドミッション・ポリシーの設計を進めるとして、それが当該大学の求める学習者像として志願者や高等学校関係者にどのように受容されるかである。学習者像を設定してそれ

で終わりとするのではなく、それが特別の受験対策を強いて過度な負担となっていないか、志願者に理解されて適切な学びの行動を促しているのか、高等学校側に理解され適切な対応がなされているか、そして入学後の学びと成長に生かされているか、などの検証と追跡の方法論が大学側の認識に共有される必要がある。

学ぶ意欲や姿勢を育てて入学へ導く新しいスタイルの入試が動き始めて2年目になる。本学では、2015年6月にアサーティブ研究センターが設置されて、アサーティブプログラム・アサーティブ入試のこれらの課題について研究開発する支援体制は整備された。今後は、学内において、高大接続のかなめとしての『基礎学力とアサーティブな態度を備えた学習者像』の意義と重要性について広く共有していくことにする。

引用文献

- 1) 国際バカロレア機構HP(日本語訳付)
<http://www.ibo.org/en/about-the-ib/the-ib-by-region/ib-asia-pacific/information-for-schools-in-japan/>、および、The International Baccalaureate HP, <http://www.ibo.org/>, (2015年10月閲覧。)
- 2) IB learner profile,
<http://www.ibo.org/contentassets/fd82f70643ef4086b7d3f292cc214962/learner-profile-en.pdf>
(2015年12月閲覧。)
- 3) International Baccalaureate, Program standards and practices for use from 1 January 2014.
<http://www.ibo.org/globalassets/publications/become-an-ib-school/programmestandardsandpractices.pdf>、および、国際バカロレア機構(文部科学省訳)「プログラムの基準と実践要綱2014年1月1日から適用」
<http://www.ibo.org/globalassets/publications/programme-standards-and-practices-jp.pdf>、
(2015年12月閲覧。)
- 4) Shelley H Billig, Linda Fredericks, Lyn Swackhamer and Emma Espe (2014), Diploma Programme : Case Studies of Learner Profile Implementation and Impact in the United States, RMC Research Corporation.
<http://www.ibo.org/about-the-ib/research/programme-impact-research/diploma-studies/>
(2015年12月閲覧)
- 5) 池田輝政・野口真弓・佐々木幾美(2014)「学位授与方針から設計するカリキュラム・マッピングの提案と実践」『大学・学校づくり研究紀要』、第6号、pp.29-40.
- 6) IB資格取得者に関する大学入学後の追跡調査について今回は触れていないが、以下の資料を参照する限りは、いまだ本格的な調査は行われていない。
Olivia Halic (2013), Research Brief: Postsecondary educational attainment of IB Diploma Programme candidates from US high schools, IB Global Research.
<http://www.ibo.org/globalassets/publications/recognition/researchbrief-postsec-3eng-2.pdf>
(2015年12月閲覧)